



## スパイク・ジョーンズの身体観 粉川哲夫

こがわ・つお／メディア批評家。『メディアの牢獄』『電子人間の未来』『シネマ・ポリティカ』『もしインターネットが世界を変えたとしたら』『映画のウトピア』ほか

### ふたりの距離

スパイク・ジョーンズがえがく愛は「距離の愛」だ。距離がなければなりたない愛、距離があるためにかえって燃え上がるような愛である。

「Her／世界でひとつの彼女」のセオドア（ホアキン・フェニックス）は、紙メディアが骨董化した近未来的な時代設定のなかで他人のために手書き風のラブレターを「代筆」する仕事をしている古風な男である。妻と別居し、孤独感のなかにもいる。音楽はメランコリックなものを好む。

彼が契約交際を始める電子人間のサマンサには体はないが、AIによって合成された声（スカレット・ジョハンソン）は生々しく、声音だけの交流が次第に昂揚していく。が、これは、近未来でなくても、いまの電話やパソコンで起こっていることだ。体とは、皮膚でおおわれた個体ではなく、機会さえあれば皮膚から溶け出し、他者とまじりあう。電子メディアは、すでに体の虚実の皮膜を越えており、音声のレベルで「体外離脱」するのは可能である。

「アダプテーション」（02）に印象深いシーンがあった。希少種の蘭から精製されたドラッグを吸った雑誌記者のスーザン（メリル・ストリープ）が、取材のなかで知り合い、愛するようにな

る蘭の密売人ジョン（クリス・クーバー）と電話で「ノー」というハミング音を出しあい、サウンドアートのレゾナンスを共有する。この場合、ドラッグよりも、電話というメディアが、たがいに離れた距離にいるふたりの体を、その距離をたもったまま溶けあわせるのである。

短篇「アーム・ヒア」（10）は、初代のMacを頭に乗せたようなシエルドンと不細工なマネキン人形のようなフランセスカとのロボットどうしのラブストーリーだが、彼と彼女の愛が深まれば深まるほど、彼女の体は壊れ、彼が自分の腕や脚を提供して助けることになる。その後さらに重体に陥った彼女は、彼から胴体を提供されて危機を脱するが、車椅子で退院する彼女の膝のうえに乗った頭部だけの彼と彼女との関係は、分断された機械と機械の距離をはらみながらも、最高に切なく、こしい愛を感じさせる。

### 古典的身体観の終わり

「Her／世界でひとつの彼女」は、このシエルドンとフランセスカの関係を逆転させた。声がヴァーチャルな「体」であるサマンサは、頭部だけのシエルドンと似た位置にいる。が、サマンサは、シエルドンよりも大胆であり、野心的である。

「マルコヴィッチの穴」（99）では、スパイク・ジョーンズの独特の身体観が提示されていた。それは、身体とは、マリオネット人形の体であり、糸の長さだけ「体外離脱」し、滲み出せるという考えだ。この糸はネットにまでは拡大されてはいないが、レズビアンにめざめるロッテ（キャメロン・ディアス）がマキシ（キャスリーン・キーナー）を愛するためにマルコヴィッチの体にもぐり込み、情交するのは先進メディア的である。ロッテは、マキシの体の相手がマルコヴィッチであっても、メディア的に深く彼女とつながってあれば、その間接関係をいとわないのであり、その結果生まれた娘は彼女らの妻子なのである。すでに代理父・母というものもあるが、その果てに見えるのは、古典的身体観の終わりである。

サマンサは、ロッテとおなじ身体観を共有する。だから、愛が高まるなかでセオドアに自分の肉体的サロゲートを派遣する。声がサマンサなら、肉体は他人でもかまわないとサマンサは思うが、旧人類のセオドアはそうしたヴァーチャルな性愛関係にはまることができない。

スパイク・ジョーンズは、「マルコヴィッチの穴」にくらべると、「Her」では旧人類に同情的である。だから、流れを再構築して、新人類を純粹培養したようなサマンサの側からこの映画を見なおさないと、セオドアという人物の「旧さ」がみ

えにくいかもしれない。が、彼は、紙メディアに執着していることがすでにそうだが、生身の体、しかも「五体満足」の体でないと落着けないというこれまでの身体観にとらわれている。

サマンサの言葉を真に受けるならば、彼女は彼との交際のなかでそれまで知らなかった愛を経験したという。が、彼女は、現在の思想家アラン・ワッツ（竹淵智子訳『ラットレース』から抜出す方法）参照）を再構築したAIにより多くの共感をおぼえている。それは師弟愛かもしれないが、彼女からオンラインでこの「人物」を紹介されたセオドアは、嫉妬の表情をあらわにする。そして彼は、サマンサが自分以外の8316人のクライアントと交流をもち、そのうち641人と「恋愛関係」にあることを知り、深いショックを受ける。

ふたりの別れに紙メディアが介在するのも示唆的だ。事務能力が抜群のサマンサは、セオドアが書いた手紙を編集して本をつくってやる。紙メディアの本など出すところはわずかになっていくが、彼女は出版社を探し出した。が、その著者刷が彼のアパートメントに届くのと入れかえに、彼女は彼との縁を切る。本はサマンサのセオドアへの愛の証であると同時に、別れの記念でもあった。いまや、紙メディアと旧い体は、肩をよせあつて夜景をながめるしかない。